○ベントス学Ⅱ　　水産科学研究科・助教授・五　嶋　聖　治

ベントス学Ⅱは3年次の学生を対象とし、おもに漁業の対象となるベントス（カニ・貝など海底にすむ底生生物）を材料に、その生態、増殖、資源管理を学ぶ専門科目である。ただし、各種の個別の知識習得を目的とするものではなく、いかなる種にも対応できるように、共通する基本原理を学ぶことにねらいを定めている。

最初の授業で、半期分の授業内容の概略を説明する。細かい事項を話す時間的余裕はないので、なにを学ぶのかをイメージできる程度の大まかな話である。ただし、その後の授業では、当日の内容が全体像のどの部分にあたるのかがわかるように繰り返した。そうすることによって、授業内容の全体像のイメージが日増しに強まると思うからである。

そのためには授業内容の体系化、あるいはストーリー性が必要である。各項目を羅列して網羅的に講義するよりは、体系化されたストーリー性のある内容の方が学生には興味がもてるだろうし、理解が深まる。すべての項目がひとつのストーリーで展開できるとは限らない。その場合でも、各項目の導入部にはなぜこの項目を学ぶ必要があるのかを、できるだけこれまでの項目と関連づけて話すことを心がけている。その項目を習得する必要性を、授業を受ける側に納得してほしいからである。今日の授業内容が全体のどの部分に当たるかがわかると理解が容易になるし、前回までの授業項目の理解も深まると思うからである。

授業形態で意識していることは、できるだけ板書して、学生にも自らノートに書いてもらうようにしている点である。OHP、液晶プロジェクターなどOA機器全盛のこのご時世に、と思われる方も多いかと思う。でも、手を使って書くという作業は、脳を刺激して、理解を深めるのに役立つと私は思うのである。なんでもかんでもプリントや液晶プロジェクターでの説明では、授業を受ける側にはただ時間が心地よく過ぎていくだけで、心に残らないように思うからである。もちろん、すべてを板書というのでは時間が足りなくなる。そこで、講義ノートは最低限必要な文言にまでそぎ落としている。プリント、OHP等は板書しにくい図や写真など最低限にとどめている。このあたりは、「もう少しプリントを配ってほしい」という学生諸氏からの要望も出るが、手を使うことの効用を説明するとだいたい理解してくれるようである。

全体像の理解と講義内容の習得度を確かめ、授業の改善に役立てるために、毎回授業のおわりに学生から質問、感想、要望などを小さな紙に書いてもらっている。これは多くの先生方がおやりになっていると聞いているので、たいした工夫とはいえないかもしれない。次の授業の最初に、出された質問にはできるだけ丁寧に答えるようにしている。本来ならば、授業中に口頭で質問してもらいたいのだが、すべての学生がそうするとは限らないので、次善の策として書いてもらっている。

できるだけ学生との双方向の授業形態にしたいと思い、授業中の質問を促してはいるがなかなか活発な意見、質問がでないことが多い。そんな時、書いてもらった質問・意見をもとに、逆に学生に考えを聞いてみることもある。そうすることによって、学生の意外な考え方が出て私自身が刺激を受けることもあり、その後の授業では質問も出やすくなるという望外の収穫もある。学生が書いてくれたこの小紙は、毎回の私の授業の採点表であり、次回の講義の組み立てにも役立つ宝の山である。

水産学は産業と関係が深い応用学問であるので、ややもすると個別の種に関する知識習得（各論）に偏りがちである。講義では、産業の現場を例にはするが、個別の話として終わるのではなく、いかなる種にも対応できるような基本原理を学ぶことに主眼をおき、あくまでも科学的問題の解決法、ものの考え方を養うことが主題であると思う。そのための授業の工夫は、まだまだ必要である。